

現代の真理シリーズ No.2

PRESENT TRUTH BOOKLET SERIES NO.2

キリストの再臨に備える



現代の真理シリーズ No. 2

キリストの再臨に備える

生きて主を迎える事と
死んで主を迎える事の違い

金城 重博

目次

Contents

キリストの再臨に備える	2
特別な準備の働き	11
偉大な恵みの働き	15

“かつてなかったほどの悩みの時”が
まもなくわれわれの前に展開する。

それだからわれわれには、

一つの経験

“今われわれが持っておらず、

また多くの者が怠けて

持とうとしない経験”

が必要なのである。

各時代の争闘 下巻 396 ページ

また、しみも、しわも、

そのたぐいのものがいっさいなく、

清くて傷のない栄光の姿の教会を、

ご自分に迎えるためである。

エペソ 5:27

キリストの再臨に備える

「キリストのみ言葉によって弟子たちに将来がはっきり示されていたように、われわれにも将来のことが預言



の中にはっきり示されている。恩恵期間の終わりに関係のあるできごとと、悩みの時のために備える働きとが、はっきり示されている。しかし多くの人々は、全然啓示を受けなかったかのように、これらの重要な真理を理解していない。サタンは、彼らに救いに至る知恵を与えるような感化をことごとく奪い去ろうとうかがっているので、彼らは悩みの時に備えができていない」 大下 359~360。

われわれは、神の大いなる日に備える事に無知である。「多くの人々」とはアドベンチスト以外の人々だと思いがちである。しかし、この「多くの人々」とはアドベンチストである事の証拠はたくさんある。160年前に、預言の霊は神の民の大部分が、必要な準備に気がつかないでいる状態を預言した。

「わたしは、また、悩みのときに、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない。」

「わたしは、多くの人々が、必要な準備をおろそかにしていながら、主の日に立ち得て神のみ前に生きるにふさわしいものとなるために、『慰めの時』と『春の雨（後の雨）』とを待っているのを見た。ああ、私はなんと多くの人々が、悩みの時に、

避け所がないのを見たことであろう。彼らは必要な準備を怠った。だから、彼らは、聖なる神の前に生きるのに適したものと、彼らをするためにすべての者が持たなければならない慰めを、受けることができなかった」初文 149。

100年以上たった今も、この最も重要な真理に関する教育は進歩していない。われわれが先駆者たちから離れれば離れるほど、生きて主を迎える者たちに呼びかけられている特別な備えの働きの重要性についての認識がますます薄くなっている証拠がどこにでも見られるのではないだろうか。

どんな誤りが神の民に入りこんできたのか？

神の民に入り込んできた誤謬は、死ぬ準備ができていたら、生きて主を迎える備えができていると思ひ込むことである。そして、これがアドベンチストの一般的な考えとして広がってい

る事は驚くべきことである。これはわれわれが1844年頃に神が与えられた真理の原点からどれほど押し流されてしまったかを表している。人は死ぬ準備ができていれば、主の再臨に備えができていたのだろうか？

1844年に再臨を待ち望んでいた人々の経験が次のように描写されている。

「この厳粛な運動に参加した人々は一致していた。彼らの心は、お互いに対する愛と、まもなくお目にかかると待望していたイエスに対する愛に満ちていた」 大下 104。

「この運動は、至るところで、人々に深く心を探らせ、天の神の前に心を低くさせた。それは、この世の事物に対する愛着を捨てさせ、争いと敵意を和解させ、罪の告白と神の前での屈伏を行なわせ、悔いなくおれて神に許しと嘉納を求めさせた。それは、これまでわれわれが目撃し

たことがなかったほど、人々の心を神の前に低くし、ひれ伏させた」同 108。

「まもなく顔と顔を合わせて贖い主に会うことを期待した人々は、言葉では表現できない厳粛な喜びを感じた」同 109。

「彼らは、毎朝、自分たちが神に受け入れられているという確証を得ることを第一の義務と感じた。彼らの心は堅く結ばれ、ともに、そしてお互いのために、祈り合った。彼らはしばしば、人里離れたところに集まって、神と交わり、とりなしの声は野や林から天にのぼった」同 110。

「聖徒たちは、至るところで、厳粛で熱烈な祈りの精神を感じた。聖なる厳粛さが彼らの上に宿った。天使たちは、深い関心をもってメッセージの結果を見守り、それを受け入れた人々を高尚にし、この世のものから彼らを引き離して、救いの泉から豊かな供給を得るようにと導いて

いた。その時、神の民は神に受け入れられた。彼らの中には、イエスのお姿が反映されていたので、イエスは、喜びをもって彼らをごらんになった。彼らは、完全な犠牲と全的献身をしており、不死の姿に変えられることを期待していた」初文 393。

私はアドベンチストの長年の信者に尋ねたことがある。「ここに描かれている人々は死ぬ用意はできていたでしょうか？」と。ちゅうちょすることなく、「それはもちろんだよ。彼らは悔い改め、義認されていた。このような経験をする者は誰でも死ぬ用意ができていますよ」という答えが返ってきた。そこで私は焦点をしばって質問した。「では彼らはイエスがこられる時に、生きて主を迎える用意はできていたかね？」驚いた彼は、確信を持って同じように答えた。そこで靈感の書から読んだ。

「私につきそっていた天使が言った。『彼らは、ふたたび、期待がはずれて失望した。イエスは、まだ、地上においてになれない。彼らは、主のために大きな試練に会わなければならない。彼らは、人間から受けた誤りや言い伝えを捨てて、全く、神と神の言葉に立ち帰らなければならない。彼らは、清められて白くされ、精錬されなければならない』」初文 399。

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった」大下 140。

靈感はこれ以上明確にすることができるだろうか？ これらの人々は罪が許された人々であった。もし死が襲ってきたなら、彼らは用意ができていたことは疑い得ない（事実、フィッチ兄弟とストックマン兄弟は死んだが、預言の

霊は、彼らはみ国に入ると証している)。しかし、イエスの証は、彼らはまだ昇天には用意ができていなかったことを明らかにしている。その事件のためにはまだ準備の働きが必要なのであった。

この長年のアドベンチストの信者は頭を振って、「どうして？ 人が死ぬ用意ができていたら主の再臨に用意ができていないのではないか？」と言った。果たしてそうだろうか？

ホワイト夫人は、これらの熱心な、悔い改めて、罪を許されていた者たちは主に会う準備ができていなかったと言明していることは見てきた。では先駆者たちがこの点についてどのように明確な考え方をしていたかを見てみよう。

先駆者の第一人者ジェームス・ホワイトは次のように言う：

「多くの者は、人が死ぬ準備ができていたら、主の再臨に備えができていていると思っている。し

かし、彼らは死ぬことと生きて主を迎える立場の違いを考えない。主にあって死ぬこと、父のみ座の前でとりなすキリストに、彼らの霊をゆだねることは一つのことであり、主が人類のためにとりなしを止め、大祭司の務めを止められ、敵に報復し、ご自分の民を迎えにおいでになるときまで、悩みの時を通過して生きる人々とは大きな違いがある。これらのことを認める者は、神のあわれみによって、聖徒たちの完全のために配慮されている方法に対して感謝するであろう」 L. S. of James and Ellen White 431。

S. N. ハスケル長老は言う：

「調査審判において、価値ある者とされた人は、天に仲保者なくして生きるのである。彼らの経験は、この地上に住んだどのグループとも異なっているのである」 The cross and its Shadow 221。

特別な準備の働き

セブンスデー・アドベンチスト先駆者たちの再臨使命の原点は、最後の世代の経験は特別な準備の働きであるという考え方に基づいていた。ジェームス・ホワイトからアンデレ



アセンに至るまで、一般的に、アドベンチストの聖書教師たちは昇天する教会の特別な経験を証していた。近年になって、その原点からずいぶん離れてきた。1964年のレビュー誌に、生きて主を迎える教会は、主にあって死んだ者たちの経験とは異なることを強く否定する記事が連載された。1844年から120年たってからの

ことで、不思議なことではないか。今や、われわれは、一度聖徒たちに与えられた信仰に戻り、第三天使の使命に叫ばれている特別な準備の働きの性質を理解する時ではないだろうか。

この特別な準備の働きへの鍵を表現するのに、次のように明瞭な言葉がほかにあるだろうか？

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心に向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていくときに、新しい義務が示されるのであった」 大下 140。

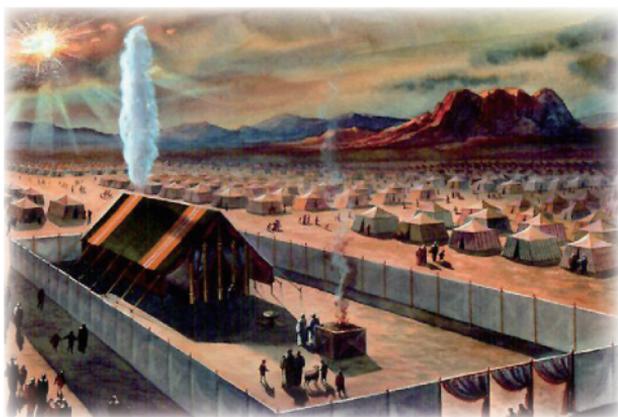
「第三の天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言って、…天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる」初文 414。

「すべての者は、天の聖所で進行中の贖いの働きに関して、もっと知的になる必要がある。この偉大な真理が悟られ、理解され、これを把握する者が、神の大いなる日に人々を備えさせる働きに、キリストと調和して働くなら、彼らの努力は成功するであろう」教会への証 5巻 575。

これらの供述は、至聖所におけるキリストの奉仕にわれわれを向ける。至聖所におけるキリストの、この特別な働きは、神の大いなる日に立ち得るように人々を備えさせるものである。この働きの性質を理解しなければ、われわれ

はこの時代にあつて必要な信仰を働かせることも、また神がわれわれのために計画されている立場を占めることも不可能である（大下 222）。

今日、われわれは大いなる贖いの日に生存している。昔の贖いの日にユダヤ人がとつた態度から、今日のわれわれに何が要求されているかを学ぶことができる。今は裁きの時であり、罪の除去の時であり、印する働きにあずかる者だけが、悩みの時に、そのみ前に生きる用意ができるのである。



偉大な恵みの働き

神がご自分の民のために成し遂げようとしておられる偉大な恵みの働きを、神のみ言葉に見てみよう。

義認：

これは恵みの最初の働きである。そして、それ以上の働きはない。それは罪人が許され、受け入れてもらうためにキリストのもとに来るときに起こることである。義認とはやさしく言って「ゆるし」である (ST, 12/17, 1902)。しかし、神の「ゆるし」は犯した罪がゆるされるだけではない。神の「ゆるし」はもっとダイナミックな経験をもたらす。

「神の許しは、罪の宣告からわたしたちを解放する法的行為であるばかりではない。それは罪の許しであるだけでなく、わたしたちを罪から救うことである。心を変えるものは、あふれでる贖罪的愛である」祝福 143。

信仰による義認は常に新生を伴う。服従を伴わない信仰による義認というものはありません。

「律法は、人間に罪を示すが、救いは与えない。律法は、服従する者には生命を約束するが、犯す者には死を宣告する。人間を罪の宣告や罪の汚れから解放することができるのは、キリストの福音だけである。人間は、神の律法を犯したのであるから、神に向かって悔い改めなければならない。そして、キリストに対しては信じてその贖いの犠牲を受け入れなければならない。こうして人間は、『今までに犯した罪のゆるし』を受け、神の性質に

あずかる者となる。彼は、子たる身分の霊を授けられた神の子であるから、『アバ、父よ』と呼ぶのである。

さて、このような人は、自由に神の律法を犯してもよいであろうか。パウロは、次のように言っている。『すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。』『罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか。』そしてヨハネは宣言する。『神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむずかしいものではない』（ローマ 3:31、6:2、ヨハネ第一・5:3)。人の心は、新しく生まれることにより、神の律法と一致するとともに、神と調和するようになる。この大きな変化が罪人の中に起きたとき、彼は、死から生命へ、罪から聖潔へ、違

犯と反逆から服従と忠誠へと移ったのである。神から離反していた古い生活は終わった。

和解の生活、信仰と愛の新しい生活が始まった。こうして、『律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされる』のである（ローマ 8:4）。そのとき、『いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います』という魂の言葉が発せられるのである（詩篇 119:97）」大争闘下 195-196。

ここで、信者は死から命へ移り、キリストの着せられる義をいただく。救い主とのこの結合を維持していく時、神のみ言葉と聖霊の改変する力によって日毎に新しくされていくのである。

こうして聖化の祝福を楽しむのである。それは神のみ像を完全に反映するまで止まない。

新約聖書の記者たちは、義認と聖化の綿密な分離をしようとしていない。われわれもそうすべきではない。義認＝ゆるしがまずあり、それから聖化の経験ではない。実際は、それは先の雨でたとえられる恵みの雨の祝福のもとにある一つの偉大な恵みの働きに含まれる。

キリストに近づけば近づくほど、ますます人は自分の罪深さ、無価値さを見せられる。ますますキリストに頼らなければ生きていけない。キリストの必要をますます強く感じる。

聖化とは、義認の持続、維持なのである。一度神にゆるされたから、永遠に救われているということではない。

聖所では、これを日毎の奉仕と呼ぶ。義人の復活のときに墓から出てくる者たちは、すべてこの義認の祝福を楽しんだ者たちである。主にあって死んだ者たちは完全に向かって聖化の祝福を楽しんだ人々である。しかし、彼らはキリストのいさおしの故に完全とみなされ、その身分が与えられたのである。

神の印：

黙示録 6 章は「神のみ怒りの日が来たのだ。だれがそのみ前に立つことができようか」というチャレンジを投げかけて終わっている。7 章でその答えが与えられている。144,000 人という聖徒のグループが、生ける神の印を受ける。これは最後の世代の聖徒たちに与えられる特別な印である。これは至聖所におけるイエスの最後の奉仕によって与えられる。それは恩恵期間の終わる前に与えられる (1SM66)。7 つの災害から守られ、悩みの時に仲保者なしに立つすべての者は、これを持っていなければならない。

「今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の

力を表わす。しかし、キリストはご自身について、『この世の君が来る…。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない』と宣言された（ヨハネ 14:30）。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、「悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである」大下 397。

黙示録 14 章を見ると、この聖徒のグループは成熟したクリスチャンの集まりであることがわかる。彼らはイエスの再臨に備えて熟するのである。彼らのうちに神の品性が完全に反映される。恵みの働きが彼らの魂に完成される。彼らの中には一つの罪もない。印されて後、彼らのうち誰一人として罪を犯さないほど恵みの働きは完璧である。

それ故に、黙示録に見られる印する働きは通常の経験ではないことは非常に明らかである。それは、最後の大きいなるあがないの日に生きる者のためになされる偉大な恵みの働きである。靈感は、しばしばこの印する働きのことを罪の除去と呼んでいる。神の印、あるいは罪の除去も、生ける聖徒たちのための裁きの祝福である。それは、後の雨と呼ばれる御霊の偉大な働きによって成し遂げられることである。

「季節の終わりに降る後の雨は実を熟させ収穫に備える。…実が熟するということは魂の内に神の恵みの働きが完成されるということである。聖霊の力によって神のみ像が品性に完成されなければならない。われわれはキリストのように全く改変されなければならない。…先の雨がその働きをしていなければ、後の雨はどんな種をも完熟させることはできない」
TM506。

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである」 大下 141。

この素晴らしい恵みの働きは、印する働きとか、罪の除去とか、後の雨とか聖徒の完全とか、いろいろ呼ばれている。それは綿密に研究されなければならない。ここで言うておきたいことは、この終わりの恵みの祝福にあずかるには、至聖所におけるキリストの働きを研究する以外に方法はないということである。この最後の恵みの働きを受けることなしには、誰であっても準備ができないということである。

また誰であっても至聖所におけるキリストの現在の奉仕の理由を知らなければ、この最後の恵みの働きを受けることはできないということである。先にあげた教会への証 5 巻 575 頁の引用文によると、神のみ業の完成を遅らせているのは、至聖所におけるこの働きに関するわれわれの無知であるということである。

クリスチャン生活は、初めに義認、途中も義認の繰り返し、完全も義認の完成である。大争闘下 216 頁にさばきの時に許しと義認が完成されることについて次のように描写されている。

「人々は、地上の法廷の判決に深い関心を示すのであるが、しかしそれも、いのちの書にその名を記された人々が、全地の審判者の前で調査される時の天の法廷における関心とは、とうてい比較にならない。仲保者イエスは、彼の血を信じる信仰によって勝利したものがみな、その罪を許され、再びエデンの家郷にもどって『以前の主権』を彼とともに継ぐ者となるように、嘆願されるのである（ミカ書 4:8）。サタンは、人類をあざむき、誘惑することによって、人類創造における神のご計画を挫折させようと考えた。しかし、キリストは今、人間が墮落しなかったかのように、この計画の実行を求められるのである。キリストは、ご自分の民のため

に、完全で十分な許しと義認だけでなく、彼らが、ご自分の栄光にあずかり、ともにみ座につくことを求められるのである。」

大争闘下 141 にこう書いてある：

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』（マラキ書 3:4）。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会』である（エペソ 5:27）。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である（雅歌 6:10）。」

栄化と不死：

たとえ完成する後の雨のバプテスマによって印されても、イエスの再臨にまだ備えができていない。悩みの時というのは、聖徒たちに不必要に与えられる拷問ではないのである。靈感は「彼らは火の炉に投げ入れられる必要がある…」と言っている（大下 394）。後の雨の後、尊い実は堅くされ、倉に収められるために熱が加えられなければならない。ちょうど米や麦が収穫されて、日に干して倉に収められるように。

また聖徒たちは悩みの時の試練を通過しても、なお彼らは神のみ子の恐るべき栄光の前に立つ備えはできていないのである。主が来られる前に、彼らは栄化されなければならない。

「やがてわれわれは、多くの水の音のような神の声を聞いた。その声が、イエスの再臨の日と時とをわれわれに知らせた。144,000の生きている聖徒たちは、その声を知って理解したが、悪人たちは、それ

を雷鳴と地震だと思った。神は時を告げられたときに、われわれに聖霊を注がれた。それで、われわれの顔は、モーセの顔が、シナイ山から下りて来たときに輝いたように、輝きはじめた」初文 63,64。

「間もなく、わたしは、天地を震動させる神のみ声を聞いた。大きな地震が起こった。建物はいたるところで倒れた。その時わたしは、大きな、音楽のような、はっきりした勝利の叫びを聞いた。わたしは、ついさきほどまで困惑と捕われの中にあつた一団の人々を見た。彼らの束縛は解かれた。彼らの上には栄光の光が輝いていた。その時彼らは、なんと美しく見えたことだろう。心労と苦労のあとはすべて消え、すべての者の顔に健康と美がみなぎっていた。彼らの回りの敵や異教徒は死人のように横たわっていた。彼らは、救われた聖なる人々の上に輝いた光に耐えられなかったのである。イエス

が天の雲にのって来られ、忠実で試みを経た一団の人々がまたたく間に一瞬にして栄光から栄光へと変えられるまで、この光と栄光とは、彼らの上にとどまった」初文 441,442。

キリストの再臨のときに、栄化された聖徒たちは、朽ちるべき体が不死を着て最後の変化を経験するのである。それから死んだ義人の一般の復活にあずかる者たちが栄化され、不死に変えられるのである。

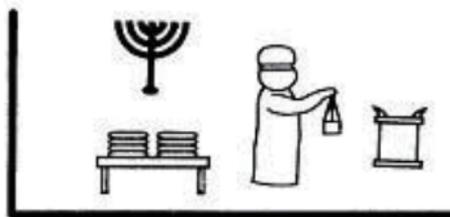
贖罪のステップ

1



外庭

2



聖所

「天の聖所における、人類のためのキリストのとりなしは、キリストの十字架上の死と同様に、救いの計画にとって欠くことのできないものである。キリストは、ご自分の死によって開始された働きを、復活後、天において完成するために昇天されたのである」大争闘下 222。

3



至聖所



再臨

質問：

第三天使の使命とそれに叫ばれている特別な準備の働きを理解しているかどうかは、次のような率直な質問をするとわかる。「私は死ぬ用意ができていれば、生きて主を迎える備えができていると思うか？」と。

「今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、『この世の君が来る……。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない』と宣言された(ヨハネ 14:30)。サタン

は、神の子の中に、彼に勝利を得させる
なんのすきも見つけることができなかつた。
神のみ子は、天父の戒めを守られた。
そして、サタンが自分に有利に活用する
ことのできる罪が、彼の中にはなかつた。
これが、悩みの時を耐えぬく人々のうち
になければならない状態なのである」大
争闘下 397。



もっと詳しく知りたい方のために...



“現代の真理”

A5版 168頁

800円

この本を正しく研究するなら、再臨信徒の困惑を整理し、魂の飢えを満たす。終末事件の研究から、今がその時であることを知る。さまざまな教理の風に吹きまわされないために、正しく理解する必要がある。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com